ソトコト想像外旅行
世界で
いちばんの国。
destination
1

Journey
to
Number

Germany

世界一、芸術家が暮らしやすい国
ドイツ。

「職業はアーティストです」と自己紹介されることが珍しくない国ドイツ。
親しい知人や友人に芸術家がいなくとも、食事やパーティに誘われて行くと必ずと言っていいほど
アーティストの知り合いができるのがドイツだ。なぜ、それほど芸術家が多いのか?

photographs by SOTOKOTO　text by Kaoru Kobayashi
special assistance from Freunde von Freunden

激動の歴史に取り残された数多くの廃墟や地区の再建に取り組み、大きな力を果たしたのはアーティストであり、芸術の力だった。

ドイツの首都ベルリンでは、人口1万人あたり80人が芸術家であるという。これは、総人口約340万人のベルリンだけで2万7200人のアーティストがいる計算になる。これを東京に当てはめると約11万人。これがどれくらい大きい数値であるかを想像できるだろうか? まさにドイツでは「友達の友達はアーティスト」なのだ。

ドイツと言えば、バッハやブラームスなど世界的な音楽家を多く輩出しているせいか、オペラやオーケストラなどを連想する人が多いかもしれない。しかし、2010年に公演された全舞台芸術6万4908回のうち、オペラは6221回、コンサートは3100回であった。それに対して劇やダンスなどは2万3187回、子供向けの劇も1万2861回と、この2つだけで全公演の半数以上を占めている。したがって、音楽だけがドイツを代表する芸術でないことがわかる。さらに2009年の統計によると、絵画、彫刻、写真などのビジュアルアーティストだけで全国に約18万人いるとされる。これはオーケストラや演劇など舞台芸術に関わる全アーティストが約5万人であったことに比べても、その3倍以上になる。様々な分野の芸術家がドイツに数多く暮らしていることがわかるだろう。

Journey to Number 1 Germany

どうして「芸術大国」なの？

なぜドイツには世界中からアーティストが集まるのか？
芸術家を愛し、芸術家に愛される理由は、芸術家を育て、
支援する社会制度と環境に秘密があるのです。

TOP 5

No 2
プロに学ぶ
「本物」の芸術教育。

芸術教育に100年以上の歴史を持つドイツ。州や学校によっても異なるが、音楽や美術の授業は学内ではなく、地域の美術学校や音楽学校で学ぶカリキュラムを組む学校も多い。これは地域在住のプロのアーティストに学ぶことで子供たちに「本物の芸術」を早くから触れさせるためだけではなく、学校と各機関・施設が連携して地域で子供を育てていくという役割もあるそうだ。授業でプロに学べるなんて贅沢！

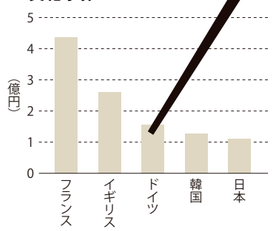
文化庁によると2009年の国家予算における文化予算の割合は、日本が0・12％（1015億円）に対し、ドイツは0・39％（1512億円）であった。割合にしてドイツは日本の約3倍、金額にしても500億円ほど多く支出していることが分かる。しかし、この数値だけでは、ドイツが文化活動に特別に多くの予算を割いているようには見えない。

舞台芸術における財源

Theaerstatistik 2009/2010 (Deutscher Buhneverein)

No 1
芸術活動を支えるのは
国ではなく市民。

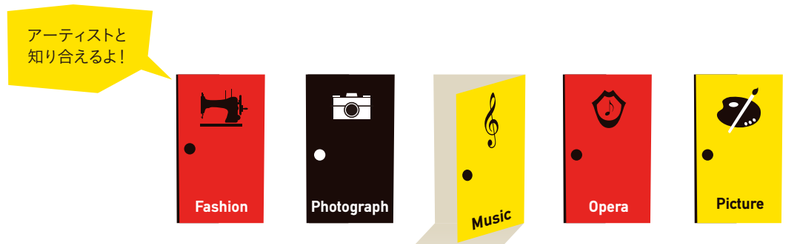
国家予算に占める
文化予算



ドイツは連邦政府制を採用しているため、各州が「国」のような権限を持つ政治システムになっている。したがって、芸術活動においても国よりも州や自治体レベルでの助成額が圧倒的に多い。また、文化や芸術活動が政治的なツールに利用されないための「自戒」も込められており、芸術や文化を育てていくのは市民であるという芸術活動に対するプライドが根底にはある。

No 4
芸術施設は身近な存在。

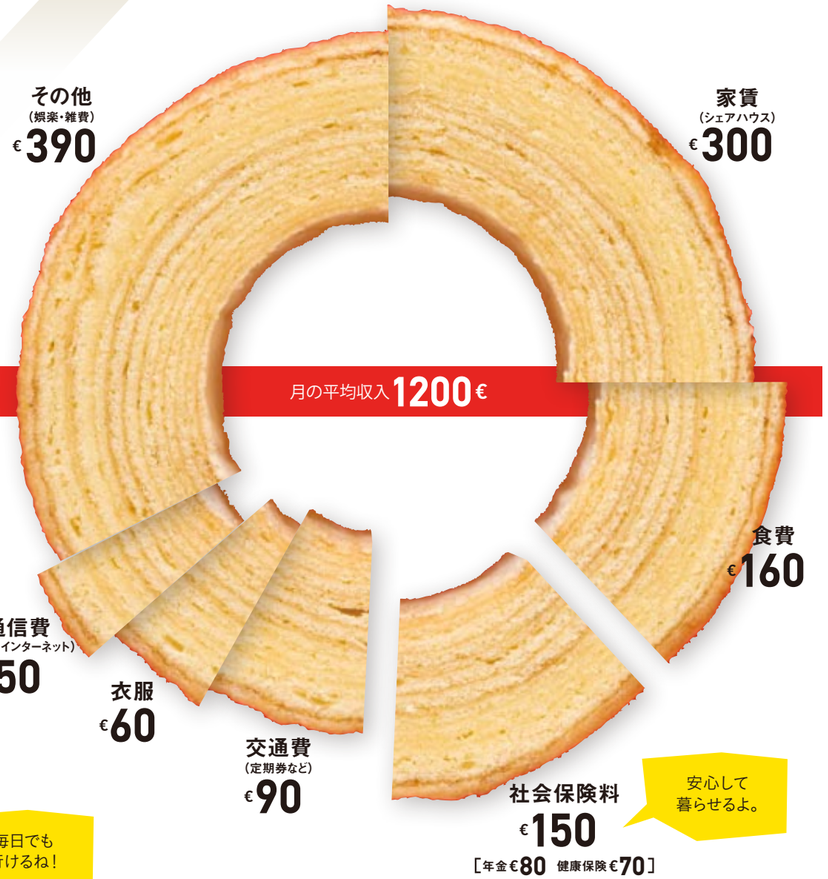
美術館や劇場やコンサートホールが多いことは言うまでないが、年に何回かは、入場料や入館料が無料の日が設けられ、「オールナイト」で美術館や野外コンサートを楽しむことができる日もある。また、ベルリンだけで600を超えると言われるプライベート・ギャラリーがあり、毎日どこかでオープニングパーティが開かれており、そこで新進気鋭のアーティストと交流することもできるのだ。もちろん、誰でも歓迎！



No 3
芸術家への社会保障が
義務づけられている。

2009年の芸術家の平均年収が約1万4000ユーロと「貧困」が話題となった。しかし、WG（Wohngemeinschaft）と呼ばれるシェアハウスが一般的であるため生活費を安く抑えられること、また、芸術家社会保障金庫（Künstlersozialkasse）で健康保険や年金、そして住宅を借りる際の融資を受けることのできる権利が法律で義務づけられているため、安心して芸術活動を続けることができるのだ。

暮らしやすい生活費　月の平均収入1200€



No 5
あの憧れの交響楽団の
リーズナブルなチケット。

200ユーロを超えるようなチケットもあるが、席にさえこだわらなければ10ユーロ程度からチケット購入が可能。もちろん、ドレスアップしてオペラやオーケストラに行く人も多いが、突然思い立ったり、ふらっと立ち寄ってチケットを購入する人も多いので、ジーンズなどカジュアルな服装の観客も目立つ。肩の力を抜いて気軽に芸術を楽しむことができるのもドイツ流なのだ。

というのも、実はドイツでは国ではなく、州や市町村といった自治体が主導的立場となって芸術・文化活動を支援しているからだ。したがって、「国家予算における文化予算」というデータは、ドイツに関してはあまり意味がない。しかし、国としてどの芸術分野に力を入れているかについて知るには、指標となる。連邦文化財団によると、2009年に一番多く助成を受けているのは写真や絵画などの展示で6894万ユーロ（当時のレートで約90億円）、2位にフェスティバルで6142万ユーロ（約80億円）、3番目にダンスや劇などの舞台で5907万ユーロ（約78億円）、そして4番目が音楽で3947万ユーロ（約51億円）であった。面白いのが5番目の1919万ユーロ（約25億円）である文学で、作家に対する奨学金も数多く用意されていることだ。さすがゲーテやシラーなど世界に名立たる文豪を数多く輩出しているドイツ！

Journey to Number 1 Germany

VISUAL ARTIST

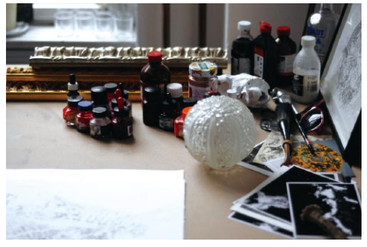
Bettina Krieg

ベッティナ・クリーク／ビジュアルアーティスト

ドイツは「私の家」であり、芸術活動の拠点。

子供の頃から芸術家に憧れ、パリに住むのが夢だったベッティナ・クリークさんは、19歳の時にパリに引っ越し、そこで約1年間暮らした。その後、ドイツに戻ってベルリンに移り住んだものの、それが芸術家になるためのベストの選択であったことを当時は知らなかったという。多くの美術館やギャラリー、世界中から集まった様々な分野の芸術家たちとの交流など、若手アーティストにとってはこれ以上の贅沢な環境はないと言う。また、芸術家を支える制度も数多く提供されている。「公的なものだけでなく、民間の奨学金や助成金を含め、アーティストが活動する環境は他の国に比べても恵まれていると思います」と言うベッティナさん自身も数多くの支援を受け、国内外で数多くの展覧会を開いている。ただし、才能ある芸術家が世界各国から多く集まるため、全ての人がその恩恵に公平にあずかることができないことも強調する。

海外経験も豊富なベッティナさんは、今後も積極的に海外での芸術活動にも力を入れていきたいと言う。しかし、アーティストとしての自分の軸であり、「私の家」と感じるドイツから拠点を替える予定はないそうだ。



上／6月2日に始まった個展の準備のために半年間、イスタンブールで暮らしたベッティナさん。そこで受けたインスピレーションを自身のスタジオに持ち帰り、新たな作業に取りかかるという。www.bettinakrieg.com
右／家賃が上がり気味の近年は、自分のスタジオやアトリエを持つことが難しくなりつつある。それでも東京やパリやロンドンに比べると破格の値段で借りることができるという。

FASHION DESIGNER

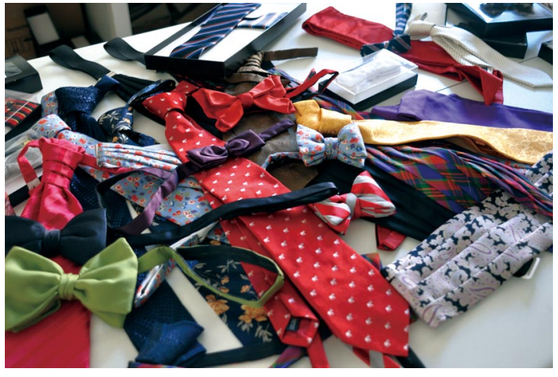
Jan-Henrik Scheper-Stuke

ヤン＝ヘンリク・シェーペー＝ストゥケ／ネクタイ・デザイナー

若手デザイナーの憧れの地で働く。

ジル・サンダーやカール・ラガーフェルドなど数多くの世界的なファッションデザイナーを輩出しているドイツ。ミニマムでスタイリッシュながらも大胆なデザインに憧れる若手ファッションデザイナーが世界中から集まり、そこで生み出されたデザインが各国で高い評価を受けている。特にベルリンはアトリエ兼ショップを持つ若手デザイナーの宝庫。そのベルリンで1909年創業の老舗ネクタイ店エドゾル・クローネンでジュニア・チーフデザイナーを務めているのが、ヤン＝ヘンリク・シェーペー＝ストゥケさんだ。

100年の伝統を踏襲しつつ、近年ではウォルフガング・ヨープやララ・ベルリンというようなドイツ発のファッションブランドとコラボレーション商品も発表して新しい風を吹き込んでいる。その役割を担っているのが若い彼なのだ。「近年、グローバル化の影響でアパレル産業は製造拠点をアジアなどに移すことを余儀なくされています。しかし、このドイツでしか生み出すことのできないデザインとクオリティの製品を世に送り出すのが私の役目です」と、若手デザイナーたちがMade in Germanyを支えている。



右／「1920年代のファッションやスタイル、そしてアールデコこそが私の人生そのもの！」というヤン＝ヘンリクさん。下／ネクタイのデザインは、路上を歩く人々など日常生活からインスピレーションを受けているという。

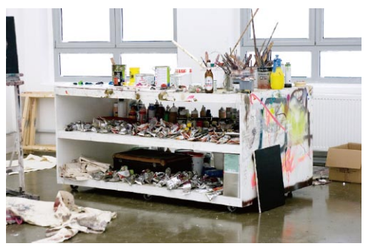
PAINTER
Andreas Golder
アンドレアス・ゴルダー／画家

Journey to Number 1 Germany

アーティストになるチャンスは平等。

今、最も注目されている新進気鋭のアーティストがアンドレアス・ゴルダーさんだ。しかし、ベルリンに移った理由は、アーティストになるためではなく、ガールフレンドを追いかけるためだったという。兵役を終え、子供の頃から得意だった絵を本格的に描き始め、大学で専門的に学ぶことを決意するも、高校を中退しているために大学受験資格がなく、名門ベルリン芸術大学には6度の挑戦で合格した苦労人でもある。

近年、中国やアメリカなどの現代アート市場で高く評価されているアンドレアスさんに海外に活動拠点を移すことは考えていないのか？　と尋ねると、「誰が自ら進んで、この〝パラダイス〟を去るわけ？」とのこと。自由な表現活動ができること、生活費が安いこと、そして非常に目の肥えたオーディエンスがいる環境は芸術家にとって魅力だという。「ドイツが特に恵まれているのは、展覧会を行えることでしょう。ベルリンだけでも600のギャラリーがあり、有名か無名かということは関係ないのです」。全てのアーティストにチャンスが平等に用意されていることが、ドイツに世界中から芸術家が集まる理由だと言う。



上／「展覧会でドイツを数か月離れても、ここはまた戻る場所」というアンドレアスさんは、5月にスウェーデン、6月中旬までベルリン、夏に北京、秋にダブリンで個展を予定している。www.michaelfuchsgalerie.com 右／「アーティストにとって自分のアトリエを持つことは夢です。近年は賃貸料が上がっていますが、それでもドイツでは比較的手頃な価格で素晴らしいアトリエを探すことができます」

PUPPET ACTOR
Emilie Jedwab-Wroclawski
エミリー・ジェドワブ=ロコラウスキ／人形劇俳優

人形劇を学ぶためドイツへ。

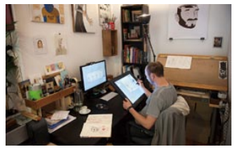
人形劇を専門的に学ぶために2006年にドイツに来たフランス人のエミリー・ジェドワブ=ロコラウスキさんは、現在も大学に在学しながら人形劇俳優として活動している。世界的な不況の煽りを受けてドイツでも芸術活動の規模縮小を余儀なくされている中、子供向けの人形劇はここ数年で公演回数を増やしている。公演に奔走するエミリーさんは、実は2歳の娘を持つママさんアーティスト。「今年も公演日程が詰まっているので、正直、子育てや学業との両立は大変です。でも、子育ての環境も芸術家が活動する環境もドイツは非常に恵まれていると思います。今後も新たな人形劇に挑戦していきたいので、ドイツを離れることを今は考えていません」。

人形劇の公演活動の他に現在、卒業制作にもクラスメートと取り組んでいるエミリーさん。

CARTOONIST
Josh Bauman
ジョッシュ・バウマン／マンガ家、イラストレーター

歴史家から漫画家へ。

アメリカ人のジョッシュ・バウマンさんがドイツに来た当時は修士号を取得してばかりの歴史家の卵だった。ドイツ語をブラッシュアップしながら博士課程に入る準備をするのが目的で、当初は1年間の滞在予定だったという。そのドイツ滞在中に漫画家として生きていく決心をしたジョッシュさん。「歴史を研究する際には仮説を立てて検証していくのですが、その創造的なアプローチやストーリーを語る点は、漫画と似ていると思います」と、キャリアの変更に何の迷いはなかったという。しかし、「ここでなければ、アーティストとしてのキャリアを純粋に追究できたかどうかと言えば疑問です」と、ドイツの社会システムと生活費の安さが芸術活動を続けるために大きな役割を果たしていることも指摘する。



「ドイツでの僕の漫画への反響が大きくて驚いています」と、2巻目を出版したばかりのジョッシュさん。
www.caffeinatedtoothpaste.com

photo = Marga van den Meydenberg

FLUTIST
Shih-Cheng Liu
劉 士誠／フルート奏者

若手音楽家に多くのチャンスがある国。

2006年にフルート奏者を目指して台湾から渡独した劉士誠さんは、大学で学ぶことだけが目的ではなかったという。「音楽は文化です。ドイツのクラシック音楽の長い歴史と愛好家を理解するためには、自らもその場で経験することが重要です」。そんな若手音楽家を支える奨学金制度も整っている。劉さんもDAAD（ドイツ学術交流会）や様々な機関や財団から支援を得て、ドイツ各地をコンサート活動で忙しく飛び回っている。「私の住むベルリンには7つのオーケストラがあり、その中にはあのベルリン・フィルハーモニーもあります。世界的に有名な音楽家が定期的にコンサートを行っており、気軽に聴きに行くことができます。こんな環境は世界中のどこを探してもないですよね。」

一流のコンサートホールで毎日のようにカジュアルなコンサートが開催されている。若手音楽家にとって、最高の環境だと劉さんは言う。